

も、おぼしけることのさまなれば、いとあはれにことわりなり、げにかくもてはやし聞え給にこそはよろづのかざりもまさらせ給ふめれ、千代もあくまじく御行すゑのかずならぬこゝちにだにおもひつゞけらる、宮のおまへぎこしめすや、つかうまつれりと我ぼめし給て、宮の御てにてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしまさず、はゝもまたさいはひ有とおもひてわらひ給ふめり、よいをとこはもたりかしとおもひたんめりと、たはふれきこえ給もこよなき御ゑひのまぎれなりとみゆ、さることもなければ、さわがしき心ちはまながらめ、めでたくのみきゝゑさせ給、どのゝうへきゝゑにおぼすにや、わたらせ給ひぬるけしきなれば、おくりせずとて、はゝうらみ給はん物ぞとて、いそぎて御丁のうちをとほらせ給、宮なめしとおぼすらん、おやのあればこそ子もかまこけれとうちつふやき給ふを、人々わらひきこゆ○又見榮花物語

〔小右記〕寛仁二年十月十六日乙巳、今日以女御藤原威子立皇后○後一條之日也、前太政大臣(道長)第三條一家立三后未嘗有

略○中太閤道長 招呼下官云、欲讀和歌、必可和者、答云、何不奉和乎、又云、誇たる歌むに有、但非宿構者、此世乎ば我世と所思望月乃虧たる事も無と思へば、余申云、御歌優美也、無方酬答、滿座只可誦此御歌、元稹菊詩、居易不和、深賞歎、終日吟詠、諸卿響應、余言數度吟詠、太閤和解、殊不責和、夜深月明、扶醉各々退出、

〔榮花物語疑十五〕殿の御前略○中御心ちれいならすおぼさるれば、人々も夢さわがしく聞えさするに、わが御心ちにもよろしからずおぼさるれば、このたびこそはかぎりなめれと、物心ぼそくおぼさる、殿ばら宮々などにもいとおそろしうおぼしなげくに、いとまことにおどろくしき御心ちのさまなり、かゝればよろづにいみじき御いのりどもさまゝなり○中内、○後一條東宮、○後一條朱雀より大宮、○彰子皇太后宮、○三條中宮、○後一條小一條院、○敦又攝政殿、○頼内の大い殿、○教

なぞみな御修法せさせ給程の御ありさま思ひやるべし略○中どのゝ御まへ、いまはいのりはせ